

【資料】

幼児期におけるアサーション育成支援の展望

畠中 智恵^{*1}

鳥羽 大峻^{*2}

A review of assertion development in early childhood

by

Tomoe HATANAKA^{*1}

Hiroataka TORIBA^{*2}

1. 研究の背景と目的

日本における気分障害患者数は年々増加しており、2017年では127万6千人にも及び、その中でもうつ病の割合が多くを占めている¹⁾。このような状況に関して、WHOをはじめとした様々な団体は、早急に対応する必要性を提言している。このような現状は成人に限ったことではなく、『子どものからだと心白書 2019』²⁾では、子どもたちの中でも「疲れやすい」「意欲・関心の低下」など、うつに関する不調が見られることが報告されている。

うつ病などのメンタルヘルスの不調に関しては、「アサーション」の問題が関係しているという研究結果がある³⁾。アサーションとは、自他を尊重した自己主張の方略である。自分の言いたいことが言えずに我慢することでストレスが溜まってしまった結果、うつなどのメンタルヘルスへの悪影響が及ぼされることを考慮すると、アサーションができることは、良好なメンタルヘルスを保つことにつながると考えられる。

アサーションとは、自分の気持ち、考え、信念などを正直に、率直に、その場にふさわしい方法で表現し、そして相手が同じように発信することを奨励する主張方略と定義される⁴⁾。アサーションは、ソーシャルスキルトレーニングとして発展したという背景を持つため、ソーシャルスキルの一種として捉えられており^{5, 6)}、児童期以降を対象として国内外で多くの研究が行われている^{7, 8, 9, 10, 11)}。

しかし、アサーションのような自己主張方略は就学前の時点においても重要視されている。例えば、名倉¹²⁾は、保育者は子どもに対して、自己主張や他者受容といった自分を出しながら他者を受け入れる社会的な能力を育てて欲しいと思っていることを明らかにしている。また、保育所保育指針解説¹³⁾や幼稚園教育要領¹⁴⁾では、子どもの育みたい資質や

受理日：令和3年3月12日

^{*1} 純真短期大学 こども学科 助教

^{*2} 一般社団法人 four leaf company

能力として、子どもが他者との関わりの中で他者の存在に気づき、相手を尊重する気持ちをもって行動できるということが記されている。このように、現代では就学前の幼児期においてもアサーションの育成を考えることが求められているが、どのようにして育成するかについての具体的な提示などはない。

本研究では、幼児期の段階におけるアサーションの育成に関して、幼児の社会的な関わりが多く見られる保育場面での育成支援という観点に立ち、子どもたちがアサーションができるようになるための具体的な支援内容や保育の在り方について、様々な知見を基に展望することを目的とする。なお、保育場面でのアサーションの育成支援に焦点を当てた理由は、ほとんどの幼児は1日の多くを保育園や幼稚園などで過ごし、他者との社会的な関わりを経験するためである。

2. 幼児期におけるアサーションの位置づけ

先述のように、「アサーション」という用語を使用した研究の多くは児童期以降を対象としている。具体的には、Children's Assertive Behavior Scale¹⁵⁾ や Children's Action Tendency Scale¹⁶⁾では、それぞれ小学生のアサーションの程度を測定することができる。国内の研究においても、児童用自己表現尺度¹¹⁾や児童用主張性検査¹⁷⁾など、児童のアサーションを測定する尺度はいくつか作成されており、柴橋¹⁰⁾は対人関係に重きが置かれる青年期を対象に、アサーションの心理的要因を明らかにしている。

一方で、幼児期において「アサーション」という用語を使用した研究は極めて少ない。その中の1つである石川¹⁸⁾の研究では、アサーションは自我の発達との関連が強いことから、幼児期はアサーションの土台が形成される時期であると表現されている。また、平井¹⁹⁾は幼児を対象として、対人葛藤場面における自己と他者に配慮した自己主張の出現に関して、自己主張と自己抑制の観点から検討を行っているが、このような自己主張を「自己調整 (self-regulation)」という用語で説明しており、これはアサーションの概念に通ずるとしている。同様に、幼児の自己主張性に着目した場合、多くの研究が「自己制御 (self-regulation)」という用語を使用し、幼児がどれだけ自己主張できるか、または、どれだけ自己の欲求を我慢できるかという2つの側面から検討している^{20,21)}。これらの研究では、自己の欲求を表現する機能と、それとは逆に自己の欲求を抑制する機能という内的な機能の発達の観点から幼児の自己主張について言及しており、自己主張機能と自己抑制機能が発達することで、他者のことも配慮した自己主張ができると捉えている。つまり、内的な機能である自己制御機能の発達により、アサーションのような主張方略を使用しながら他者と円滑なコミュニケーションを取ることができるようになるということである。そのため、児童期以降に調査されているアサーションは、内的な機能である自己制御機能の発達がある程度達成された際に、外的に表出される主張方略であると捉えられる。加えて、アサーションには言語能力や認知能力、対人経験が影響することから¹⁹⁾、これらの機能が未発達な幼児は「アサーション」という言語的に表出される主張方略について検討されることが少ないと考える。

しかしながら、このことは、幼児は「アサーション」ができないということを示すわけではないと考える。実際に幼児期の段階でも、自己と他者に配慮したアサーションのよう

な主張方略が見られると報告されている。具体的には、幼児の対人葛藤での対処法を検討した調査では、3～6歳児でも自己と他者の欲求に配慮した対処を行っていることが明らかになっている^{19,22)}。つまり、この時期に見られる自己と他者に配慮した主張方略は、児童期以降に見られるアサーションの土台のようなものであると考える。そして、このアサーションの土台のような主張方略に着目することで、保育者は幼児の内的な機能である自己制御機能の発達を外的な表出として捉えることができるようになる。幼児期は社会的スキルが発達する時期である^{23,24)}ことを考えると、児童期以降のアサーションの発達を促すためにも、保育場面において幼児の自己制御機能の外的な表出を適切に捉えていくことに意義があると考ええる。

以上のことから、本研究では、保育場面におけるアサーションの育成支援に着目しているため、幼児の内的な機能ではなく、外的に表出された主張方略に焦点を当て、この時期に見られるアサーションの土台のような主張方略を「幼児のアサーション」と呼ぶ。

3. アサーションと視点取得

児童期以降を対象としたアサーション研究において、アサーションの構成要素に関する知見がいくつか見られる。Abrahami, Selman, & Stone²⁵⁾は小学生を対象に、視点取得の発達段階の高い子どもほど対人葛藤場面において効果的な言語表現をしているという結果を示している。また、安藤・新堂²⁶⁾は、視点取得が未熟で自己中心的視点が強いと言われる非行少年(15～19歳)の対人葛藤場面における主張スタイルを調査し、非行少年の中でも、視点取得の発達段階が高い者ほど対人葛藤場面でアサーションを行う者が多いことを明らかにした。さらに、視点取得のトレーニングを行い視点取得の発達段階が上がるにつれて、他者とのコミュニケーション場面でアサーションを選択するようになるという研究結果もある^{26,27)}。特に、Chandler, Greenspan, & Barenboim²⁷⁾は、視点取得を土台として、アサーションのような言語的なコミュニケーションができるようになることを考察している。以上のような児童や青年を対象とした先行研究からは、他者の視点に立ち物事を考えることができる視点取得の能力が、アサーションを構成する要素の1つであるということが示唆されている。

一方で、幼児を対象とした研究においても、同様の知見が得られている。なお、先述したように、幼児期においては「アサーション」は「自己調整(制御)」という機能的側面から研究されている。大対・松見²⁸⁾は、視点取得ができる幼児ほど、対人葛藤場面において「やめて」といった言語的で率直な主張など、相手との関係を悪化させないような望ましい言語的な対処を選択することを報告している。また、平井¹⁹⁾は、幼児を対象に、対人葛藤場面における自己と他者の両方に配慮した解決法と認知的発達との関連を検討し、対人葛藤時に自己と他者の両方に配慮できる幼児は、そうでない幼児よりも他者の誤信念を理解していることを明らかにしている。つまり、幼児においても、幼児期のアサーションのように自己だけでなく他者の考えや意見を配慮した自己主張方略を行うには、他者の視点に立って物事を捉えられるという能力が必要であると考えられる。

4. アサーションと共感性

前章では、アサーションと視点取得の関連について述べたが、他者の視点を取得できているだけでは必ずしも社会的行動を促進するとは限らないという知見も報告されている。Artinger, Exadaktylos, Koppel, & Sääksvuori²⁹⁾は、大学生を対象に利益分配に関わる取引を行う最後通牒ゲームを用いて、自己中心的な人は他者の心を効果的に読みながら自分自身の利益のために行動することを示しており、他者視点が悪用されることがあると指摘している。また、幼児においても同様のことが報告されており、畠山・畠山³⁰⁾は、関係性攻撃を行う幼児は、関係性攻撃を行わない幼児よりも、相手の感情を推測する能力が高いことを報告している。関係性攻撃とは、悪口を言いふらして仲間外れにするなど仲間関係を操作することによる攻撃であり、このような高度な攻撃を行うためには、ある程度の認知能力の高さが求められる。つまり、成人のみでなく、幼児でも他者の視点を取得していることが悪用されることがあり、視点取得の能力だけでは社会的にふさわしい行動ができない場合があることを示唆している。

このような知見に関して、社会的な行動をするためには、視点取得に加えて共感性が必要であるとの指摘がある^{31, 32)}。溝川・子安³¹⁾は、大学生を対象に、自分が嫌いな人が不利益な状況に陥っている際に介入して助けるか助けないかの判断に関して、視点取得と共感性の観点から検討した。結果として、共感性が高い人は共感性の低い人に比べて、自分の嫌いな人の不利益な状況に対して介入することが示された。その一方で、自分が嫌いな人の不利益な状況に対する介入の有無に関して、視点取得の高さに違いは見られなかったが、視点取得の高い人は介入しない理由として「困っているのはいい気味だから」と述べていたことを示した。不利益な状況に陥っている他者を助けるという行為が社会的にふさわしい行動であると考え、他者の視点を取得しているだけでは他者志向的な行動は見られず、社会的にふさわしい行動をとるためには、視点取得に加えて共感性が伴っている必要があると示唆されている。

アサーションは対人葛藤という社会的な場面で使用され、相手を傷つけない主張方略であることから、社会的にふさわしい主張方略であると考えられる。つまり、これまでの知見を踏まえると、アサーションを行う際にも、視点取得の能力だけでなく、共感性が必要であると考えられる。

5. 幼児期のアサーション育成の手がかりとなる知見

他者視点の取得と共感性が自己と他者に配慮した主張方略を促すと考えた畠中・中本・幾留・森³³⁾は、幼児の鬼ごっこ遊びにおける他者の視点に立った追いかかけ方と共感性の高さが、幼児期の自己と他者に配慮した主張方略（幼児期のアサーション）と関連するかにについて検討を行った。結果として、他者の視点に立った追いかかけ方ができる幼児ほど、日常生活場面で自己と他者に配慮した主張方略を行っていることが示された。この研究では、共感性との関連を示すことはできていないが、鬼ごっこ遊びという遊び場面での他者視点の取得と、自己と他者に配慮した主張方略との関連が示されたことは興味深い。

この研究から得られた結果として特筆すべき点は2つある。1つは、幼児が実際に遊んでいるという自然な文脈の中で見られた行動と社会的スキルの関連を示している点である。

Szarkowicz³⁴⁾ は、幼児を対象に、スマーティ課題のような伝統的な方法での誤信念の理解と、遊び場面での誤信念の理解との間に違いが見られるかを検討し、隠された物を見つける過程で実験者の誤信念を理解するといった実際の遊び場面の方が、他者の誤信念を理解できることを示している。このように、幼児は他者の心を推測することにおいて、意図的に設定された実験課題よりも、より自然で自分たちに親和性のある課題の方がベストなパフォーマンスを発揮できると示されているが^{35,36)}、これまで、そのような文脈で見られた行動と社会的スキルの関連は示されていない。つまり、畠中他³³⁾で得られた結果は、幼児自身の「他者視点に立つ」という本来のパフォーマンスと自己と他者に配慮した主張方略との関連を示していると考えられる。

2 つめは、鬼ごっこという遊びは他者の視点に立つ経験をしやすいと考えられる点である。Kamii & DeVries³⁷⁾は構成主義の立場から、集団遊びの価値に関して、集団遊びにおける仲間との関係は子どもたちに脱中心化を促し、自己と他者の異なった視点を協応させる能力を発達させることを示している。そして、様々な集団遊びの中でも、鬼ごっこでは、オニ役がコ役を追いかけて捕まえるにあたり、自己の視点をコ役の視点と協応させ、コ役がどこに逃げるかを予測していると述べている。つまり、集団遊びの中でも鬼ごっこ遊びは、幼児が他者の視点に立つという視点取得を経験することができる遊びであると考えられる。

このように、鬼ごっこ遊びは視点取得を経験しやすいという観点から、保育場面におけるアサーション育成支援のヒントを提案することができると考える。まず1つは、保育者は、鬼ごっこ遊びと限定された場面ではあるが、幼児の視点取得の程度を容易かつ客観的に把握することができる。幼児の視点取得の程度に関しては、これまで日常生活場面での客観的な評価基準は提案されていない（三ツ山課題や誤信念課題などの実験的な方法はあるが、これはあくまでも実験的な文脈であった）が、保育者が子どもたちの鬼ごっこ遊びの様子を観察することで、子どもに対する理解を十分に深め、各幼児の視点取得の程度を把握することができる。2 つ目は、視点取得の程度を捉えることで、子どもたちの他者視点の取得を促すような保育戦略を立てることができる。例えば、Chandler, Greenspan, & Barenboim²⁷⁾ は、他者の視点を取得することに関して、早期介入や経験の効果を指摘している。経験による効果があるのであれば、他者の視点を取得する経験における個人間格差を埋めることが保育者には求められる。そうした場合に、各幼児の視点取得の程度を把握できることは、各幼児に必要な支援を計画することにつながるであろう。その1つとして、鬼ごっこのような他者との関わりを含む遊びは有効な手段であると考えられる。加えて、このような他者の視点を取得する要素を含む遊びを設定保育として、クラス全員が参加する形で実施すれば、視点取得の経験の個人差を小さくすることもできるであろう。

一方で、先述したように、アサーションのような自己と他者に配慮した主張方略には、視点取得だけでなく共感性も必要であると考えられるが、幼児を対象とした畠中他³⁴⁾の研究では、共感性と自己と他者に配慮した主張方略との関連は示されていない。この点に関しては、共感性の捉え方を見直す必要があると報告している。そのため、今後は、幼児期のアサーションにおける共感性の役割を理解し、明らかにしていくことが必要である。さらに、アサーションのような自己と他者に配慮した主張方略を構成する要素を明らかにし

ていくことで、このような主張方略を包括的に理解できるようになり、結果として、アサーションを育成するためのより信頼性のある教育的アプローチに繋がると考える。

6. アサーション育成支援のための保育のあり方

日常生活において、他者とのコミュニケーションは欠かすことができない社会活動であり、その中で円滑なコミュニケーションをとり、健康的に生活するためのスキルの1つとして、本研究ではアサーションに着目した。そして、アサーションができるようになるために、保育現場において幼児期にどのような支援ができるかという観点から様々な知見を基に論じてきた。結果として、幼児期に視点取得や共感性といった能力を培うことが必要であり、これらの能力は、例えば鬼ごっこ遊びなどの社会的な関わりの要素をもつ遊びにおいて、経験されやすいのではないかと考えた。

ピアジェの構成主義では、我々は外界との関わりを通して認知的な発達が促されると考えられている³⁸⁾。そして、遊びは、子どもにとって自発的なものであり、さらに年齢を重ねるにつれ、遊びの中で他者との関わりは必然的に生じる。様々な保育のテキストには、遊びの中で社会性が獲得されると記されているが、明確なエビデンスは少ないのが現状である。

しかし、幼児の遊び場面の中で見られる認知的な能力と社会的な主張方略との関係を示した知見もあり³⁹⁾、今後も幼児の遊びを通した社会性の育成に関する研究がなされる必要がある。それと同時に、保育現場においても、子どもの遊びが持つ価値や認知的・社会的な発達における役割を保育者が理解しておかなければならない。具体的には、子どもたちにとってその遊びはどのような意味があるのか、遊びの中での子どもの言動からその子の発達の程度を推察するなど、遊びの観察・分析は常に行われるべきであると考え。そうすることで、子どもたち自身で遊びを作り出せるような環境設定や、子どもたちが自然に他者の視点に立つような経験を促す声かけや道具の配置といった戦略的な保育に繋がっていくと考える。例えば、児童を対象とした研究ではあるが、加納・山本³⁹⁾は、他者と注意を共有させることを他者への共感と定義し、鬼ごっこ遊びの中で自己と他者の視点を協応させることができる子どもほど他者への共感が高いことを示している。このことから、遊びの中で他者と視点を協応させる機会を創出することは可能であると考え。そのような機会の1つとして、Kamii & DeVries³⁷⁾は、他者の動きから他者の心の動きを読み取ることが必要となる陣取りあそびの事例を紹介している。この事例では、保育者が遊びの輪の中に入り、保育者自身の動きを大きくすることで子どもたちが保育者の意図を読み取りやすくなるように工夫したり、保育者から子どもたちに協力しようという合図を送ることにより、子どもたち同士の視点の協応を促すといった保育場面の工夫が紹介されており、実際に子どもたちは自発的に他者と視点を協応させながら遊ぶようになっていったことが示されている。このような工夫は、保育者の言動をきっかけとして子どもたちが他者と視点を協応させることができるような仕掛けを遊びの中に提供している。また、田中⁴⁰⁾は、鬼ごっこ遊びの中で、年長の幼児ほど、コ役はオニ役が捕まえにくいように他者と距離を取って逃げることを明らかにしており、これは年長ほど遊びの中で複数の他者を意識できるようになっていることを示していると述べている。この視点から子どもの遊びを観察するこ

とができれば、子どもたちの鬼ごっこ遊びの様子を観察する中で、他者と距離を取って逃げるが多かったり、ある特定のコ役ではなく複数のコ役を追いかけることができている場合には、オニ役とコ役が1対1になるようなルールではなく、一個人がオニ役にもコ役にもなって、より他者の動きや視点を意識する必要があるような「たから取り鬼」³⁴⁾などの遊びへと展開することもできると考える。加えて、より多くの運動パターンを経験している幼児ほどより高い運動能力を有していると示されているが⁴¹⁾、この運動能力には遊具の種類も影響しているという知見もある⁴²⁾。つまり、園に設置してある遊具も子どもたちの遊びの経験に影響することが明らかになっている。そのため、保育者の声かけや遊びの中での仕掛けだけではなく、遊びの環境にも配慮する必要がある。

以上のような保育の捉え方が、保育現場で幼児期のアサーション育成を支援することに繋がると考える。そして、研究で得られたエビデンスと保育現場での活用といった両者のつながりが、今後の保育の中では重要になってくるだろう。

【References】

- 1) 公益社団法人全国労働衛生団体連合会 (2017). 統計情報 患者調査 Retrieved from <http://www.zeneiren.or.jp/cgi-bin/pdfdata/20110316201549.pdf> (2020 年 10 月 14 日)
- 2) 子どものからだと心・連絡会議 (2019). 第 2 部 子どものからだと心の基本統計 子どものからだと心・連絡会議 子どものからだと心白書 2019 (pp. 58-59) Book House HD.
- 3) 玉瀬耕治・角野文宣 (2005). 対人ストレスとアサーション、セルフ・コントロールの関係 奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要, 14, 37-41.
- 4) 平木典子 (2009). 改訂版アサーション・トレーニング——さわやかな自己表現のために—— 金子書房.
- 5) 相川 充 (2002). 人づきあいの技術——社会的スキルの心理学—— サイエンス社.
- 6) Romano, J. M., & Bellack, A. S. (1980). Social validation of a component model of assertive behavior. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 48, 478-490.
- 7) Deluty, R. (1981). Assertiveness in children: Some research considerations. *Journal of Clinical Child Psychology*, 10, 149-155.
- 8) Ollendick, T. H. (1983). Development and validation of the Children's assertiveness inventory. *Child and Family Behavior Therapy*, 5, 1-15.
- 9) 柴橋祐子 (2001). 青年期の友人関係における自己表明と他者の表明を望む気持ち 発達心理学研究, 12, 123-134.
- 10) 柴橋祐子 (2004). 青年期の友人関係における「自己表明」と「他者の表明を望む気持ち」の心理的要因 教育心理学研究, 52, 12-23.
- 11) 渡部玲二郎・稲川洋美 (2002). 児童用自己表現尺度の作成, および認知的変数と情緒的変数が自己表現に及ぼす影響について カウンセリング研究, 35, 198-207.
- 12) 名倉一美 (2017). 5 歳児の育ち合い保育実践を通して保育者が期待している効果——「社会的自己調整能力」と「集団所属感」に注目して—— 教科開発論集, 5, 33-41.
- 13) 厚生労働省 (2018). 保育所保育指針解説 フレーベル館.

- 14) 文部科学省 (2008) 幼稚園教育要領 Retrieved from
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/you/you.pdf (2021 年 2 月 3 日)
- 15) Michelson, L., & Wood, R. (1982). Development and psychometric properties of the Children's Assertive Behavior Scale. *Journal of Behavioral Assessment*, 4, 3-13.
- 16) Deluty, R. (1984). Behavioral validation of the children's action tendency scale. *Journal of Behavioral Assessment*, 6, 115-130.
- 17) 古市裕一 (1995). 児童用主張性検査の開発 こころの健康, 10, 69-76.
- 18) 石川真由美 (2011). 幼児期に育みたい自己主張 愛知教育大学附属幼稚園研究紀要, 第 40 集 101-111.
- 19) 平井美佳 (2017). 幼児期における自己と他者の調整とその発達 教育心理学研究, 65, 211-224.
- 20) 柏木恵子 (1988). 幼児期における「自己」の発達 ——行動の自己制御機能を中心に—— 東京出版.
- 21) 大内晶子・長尾仁美・櫻井茂男 (2008). 幼児の自己制御機能尺度の検討——社会的スキル・問題行動との関係を中心に—— 教育心理学研究, 56, 414-425.
- 22) 長濱成未・高井直美 (2011). 物の取り扱い場面における幼児の自己調整機能の発達 発達心理学研究, 22, 251-260.
- 23) 大國ゆきの (2019). 乳幼児期の学びに関わる理論②遊び 青木紀久代 (編) シリーズ 知のゆりかご——保育の心理学—— (pp.140-157) みらい.
- 24) 鹿子木康弘 (2014). 発達早期における向社会性——その性質と変容—— 発達心理学研究, 25, 443-452.
- 25) Abrahams, A., Selman, R. L., & Stone, C. (1981). A developmental assessment of children's verbal strategies for social action resolution. *Journal of Applied Developmental Psychology*, 2, 145-163.
- 26) 安藤有美・新堂研一 (2013). 非行少年における視点取得能力向上プログラムの介入効果——視点取得能力と自己表現スタイルの選好との関連—— 教育心理学研究, 61, 181-192.
- 27) Chandler, M. J., Greenspan, S., & Barenboim, C. (1974). Assessment and training of role-taking and referential communication skills in institutionalized emotionally disturbed children. *Developmental Psychology*, 10, 546-553.
- 28) 大対香奈子・松見淳子 (2007). 幼児の他者視点取得、感情表出の統制、および対人問題解決から予測される幼児の社会的スキルの評価 社会心理学研究, 22, 223-233.
- 29) Artinger, F., Exadaktylos, F., Koppel, H., & Sääksvuori, L. (2014). In others' shoes: Do individual differences in empathy and theory of mind shape social preferences? *PLoS ONE*, 9, e92844.
- 30) 畠山美穂・畠山 寛 (2012). 関係性攻撃幼児の共感性と道徳的判断, 社会的情報処理過程の発達研究 発達心理学研究, 23, 1-11.
- 31) 溝川 愛・子安増生 (2015). 他者理解と共感性の発達 心理学評論, 58, 360-371.

- 32) 田中里奈・清水光弘・金光義弘 (2013). 幼児期における他者視点取得能力の発達と社会性との関連 川崎医療福祉学会誌, 23, 59-67.
- 33) 畠中智恵・中本浩揮・幾留沙智・森 司朗 (2020). 幼児期のアサーションの形成に影響を与える要因の検討——運動遊び場面での視点取得行動と共感性に着目して—— 鹿屋体育大学学術紀要, 57, 111-119.
- 34) Szarkowicz, D. L. (1999). Young children's false belief understanding during play. *The Journal of Genetic Psychology*, 160, 243-254.
- 35) Glenn, S. M., Johnson, K., & Parry, F. (1993). Onset of theory of mind: Methodological considerations. *Early Child Development and Care*, 86, 39-51.
- 36) Mitchell, P., & Lacohee, H. (1991). Children's early understanding of false belief. *Cognition*, 39, 107-127.
- 37) Kamii, C., & DeVries, R. (1980). *Group Game in Early Education: Implications of Piaget's Theory*. Washington, D. C.: National Association for the Education of Young Children.
(カミイ, C. ・デヴリーズ, R. (2002). 第 I 部 集団ゲームについての考え方 第 2 章 集団ゲームのねらい カミイ, C. ・デヴリーズ, R.: 成田錠一 (監訳) 幼稚園保育所集団遊び——集団ゲームの実践と理論—— 北大路書房)
- 38) Piaget, J. (1970). Piaget's theory. P. H. Mussen (Ed.). *Carmichael's manual of child psychology* (3rd ed.) : Vol. 1. New York: John Wiley and Sons.
(ピアジェ, J. (2009). I 章 主体と客体との諸関係 1 節 認識の源泉 ピアジェ, J.: 中垣啓 (訳) ピアジェに学ぶ認知発達の科学 (pp.8-12) 北大路書房)
- 39) 加納岳拓・山本裕二 (2020). 他者への共感の育成に向けた体育授業の可能性——小学校 1 年生の教室授業と体育授業における行動の分析—— スポーツ心理学研究, 47, 13-28.
- 40) 田中浩司 (2005). 幼児の鬼ごっこ場面における仲間意識の発達 発達心理学研究, 16, 185-192.
- 41) 吉田伊津美・森 司朗・筒井清次郎・鈴木康弘・中本浩揮 (2015). 保育者によって観察された基礎的運動パターンと幼児の運動能力との関係 発育発達研究, 68, 1-9.
- 42) 杉原 隆・森 司朗・吉田伊津美 (2004). 幼児の運動能力発達の年次推移と運動能力発達に関与する環境要因の構造的分析 平成 14～15 年度文部科学省科学研究費補助金 (基盤研究 B) 研究成果報告書.